

宗教的多元性とキリスト教 東アジアを中心に

芦名定道

(1) 問題

現代世界のグローバル化と多元化の動向における対立・相克といった問題状況
宗教的多元性の状況下での対立・相克の現実に対する寛容・和解の可能性
キリスト教そして東アジア

(2) 東アジアの宗教状況とキリスト教

1. 東アジアの宗教状況、この地域の広域的な共通性・広範な相互交流
多層構造「基層宗教 / 民族宗教 / 世界宗教」 / 宗教的制度としての「家」
2. 伝播当初の共通性・類似性から現代の日本、韓国、中国のキリスト教の多様な形態へ
3. 【アジアの宗教動向予想】(*World Christian Encyclopedia*. second edition, Oxford University Press 2001)

| | イスラム | ヒンズー | 無宗教 | 仏教 | キリスト教 |
|-------|--------|------|------|-----|-------|
| 1995年 | 21.8 % | 21.6 | 16.9 | 9.8 | 8.2 |
| 2000年 | 22.5 | 21.8 | 16.5 | 9.6 | 8.5 |
| 2025年 | 25.7 | 21.9 | 14.8 | 8.6 | 9.8 |

中国のキリスト教

| | 無宗教 | 民俗宗教 | 無神論 | 仏教 | キリスト教 |
|------|-------|------|-----|------|-------|
| 1900 | 0.0 % | 79.7 | 0.0 | 12.7 | 0.4 |
| 1995 | 42.3 | 28.7 | 8.4 | 8.3 | 6.5 |
| 2000 | 42.2 | 28.5 | 8.1 | 8.4 | 7.1 |
| 2025 | 40.6 | 28.6 | 7.5 | 8.5 | 9.2 |

韓国のキリスト教

| | 儒教 | 民俗宗教 | 新宗教 | 仏教 | キリスト教 |
|------|-------|------|------|------|-------|
| 1900 | 8.0 % | 81.3 | 0.1 | 10.0 | 0.5 |
| 1995 | 11.2 | 16.2 | 15.2 | 15.4 | 40.2 |
| 2000 | 11.1 | 15.6 | 15.2 | 15.3 | 40.8 |
| 2025 | 9.6 | 15.5 | 15.4 | 13.9 | 43.2 |

日本のキリスト教

| | 神道 | 無宗教 | 新宗教 | 仏教 | キリスト教 |
|------|--------|-----|-----|------|-------|
| 1900 | 15.0 % | 0.0 | 4.5 | 79.6 | 1.0 |

| | | | | | |
|------|-----|------|------|------|-----|
| 1995 | 2.2 | 10.1 | 25.8 | 55.4 | 3.6 |
| 2000 | 2.1 | 10.2 | 25.9 | 55.2 | 3.6 |
| 2025 | 1.7 | 11.6 | 26.8 | 51.2 | 4.1 |

4．近代以降の民族あるいは民族主義とキリスト教との関係性

韓国キリスト教：民族主義と緊密な関係を持ち民族意識の構成要素の一つ

日本キリスト教：民族主義との対立（民族主義からの圧迫）あるいは民族的なものからの意識的な差異化を基調とする

(3) 宗教的寛容論の再構築に向けて 民族と公共性

5．東アジアの宗教状況から、宗教と民族、あるいは宗教と国家との関わりについて、従来の西欧近代のモデルを修正するような新しい視点をはたして見いだすことができるかどうか 中国、韓国、日本における宗教と民族との多様な関係性の存在が有する意味、という問い。

6．内村鑑三(1861-1930)：不敬事件(1891年1月9日)

7．「二つのJ」(JesusとJapanの二つへの愛)

「小生は単なるクリスチャンの日本人として生き、普通の日本人として死ぬ事を願います。キリストと日本とは小生の合い言葉です。」(1885年、新島襄宛の手紙)

8．1．日清戦争は東洋の近代化のための義戦である(『日本人の天職』(1892年)

「日清戦争の目的如何」(1894年))

2．「<義戦>はほとんど略奪戦に近きものと化し、その戦争の<正義>を唱えた予言者は、今や深い恥辱のうちにあります。」(アメリカの友人ベル宛の書簡)

3．「余は日露非開戦論者であるばかりでない。戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうした人を殺すことは大罪悪である。そうした大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。」(「戦争廃止論」)

9．I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God.

10．実体原理と批判原理：「足尾銅山鉍毒事件は大日本帝国の大汚点なり。」(「鉍毒地巡遊記」)

11．「第一に戦敗必ずしも不幸にあらざる事を教えます。国は戦争に負けても滅びません、実に戦争に勝って亡びた国は歴史上決して少ないのであります、国の興亡は戦争の勝敗に因りません、其の平素の修養に因ります、善き宗教、善き道徳、善き精神ありて国は戦争に負けても衰えませんが、否な、其の正反対が事実であります」、「国の実力は軍隊ではありません、軍艦ではありません、将た又金ではありません、銀ではありません、信仰であります。」(「デンマルク国の話」岩波文庫)

12．国家の繁栄、国民の幸福を測る尺度

イエス・キリスト(神の国)と神、そして農業を中心とした非軍事的な小国

13．民族において民族を超える民族主義(自己超越的民族主義) 民族のメタファー化

(4) 家族のメタファー化から民族へ

14．「人間集団は時間が経過するについてその構成員が必然的に入れ替わる以上、

構成員自体の同一性を語ることはできない。そこで出てくる発想の一つに、民族には超歴史的な本質が内在し、構成員とは別にあるいは独立に実在し続けるというものがある」(小坂井、2002、30頁)。「民族が虚構にすぎないならば、なぜ民族問題がかくも恐ろしい力で人々を襲い、苦悩に巻き込むことがあり得るのかという疑問が持たれるかもしれない。しかし民族だけに限らず、個人心理から複雑な社会現象にいたるまで実は虚構と現実とは密接な関わりを持っている」(同書、59頁)。

15. 「其の次ぎは家庭問題である。如何にして之を改良せん乎、是れ我国目下の最大問題である、然し家庭は之に善き音楽と文学とを供したればとて改良することの出来るものではない、.....文明国二千年の経験として聖き美はしき家庭を作るに方て基督教に優るの勢力はない、儒教は政治家を作り、仏教は哲学者を作るかも知らないが、然し温良なる夫と、常識に富む妻と、従順なる子と勤勉なる僕を作るものにして基督教に優るものはない、日本人は基督教なしに他の事は出来るかも知らぬが、家庭の改良のみには基督教に依らなくてはなるまいと思ふ。」(内村鑑三「余の従事しつつある社会改良事業」1901年12月30日)

16. 近代的な家族制度を特徴づける一夫一婦制：「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」(創世記2章18節)、「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」(24-25節) 引用は、『聖書 新共同訳』日本聖書協会、による。

17. キリスト教の家族観の背景としての古代イスラエルの家族制度

18. 「家族」をめぐるイエスの発言から、キリスト教の家族観の特徴を取り出す。

「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにはふさわしくない。」(マタイ 10:34-37)

「さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、『婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です』。それからこの弟子に言われた、『ごらんなさい。これはあなたの母です』。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。」(ヨハネ 19:25-27)

「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである。」(マルコ 3:34-35)

19. 「最終的に最後のアフォリズムにおいて、イエスの家族に対する攻撃の論点はきわめて明瞭になっている。5人のメンバーからなる標準的な地中海的家族、つまり母と父、妻をもった既婚の息子と未婚の娘という拡大核家族全員が一つ屋根の下で生活していることを想像いただきたい。イエスは、自分はこの家族を引き裂くと述べているのである。.....この攻撃は信仰に関わっているのではなく、権力に関わっている。攻撃は父母を息子、娘、嫁の上に置く地中海的家族の権力軸に加えられているのである」(Crossan, 1994, pp.59-60)。

20. 「家族のメタファー化」: テキスト とテキスト ・ との間に見られる「家族」の意味転換プロセス、「批判(否定) 転換 拡張(肯定)」という意味の運動、家族の存立に関する、自然的関係基盤(=血のきずな)から精神的関係基盤(=神のみこころ)への移行
21. 内村鑑三の民族観: 同時代において展開しつつあった日本の民族主義あるいは愛国論に対して、同じ日本を愛するという言葉を使用しつつも、その意味内容を、自民族中心主義を相対化するものへと転換する議論(自己超越的民族主義)
22. 東アジアの宗教的多元性という文脈における民族(あるいは、国民国家、民族主義)と宗教の関係性: それぞれの宗教的信仰に立つ多様な立場から、共通の自己超越的な民族性を構築する共同作業を位置付けること。この共同作業は、宗教的多元性に基づく宗教間対話の営みを含むものであり、それは宗教間対話の場としての「公共性」の生成とすることができる。

(5) 展望

23. 民族のメタファー化: 「私(個人)/親密圏(家族など)/公共/市民社会/公」といった諸階層をいわば下から貫く公正性の生成の動き。
 西欧の政教分離システムがしばしば陥る「私」と「公」の抽象的な二分法から、より実体に即した社会における宗教の理論的位置づけの可能性

<文献>

1. 民族について

- ・ 蓮實重彦・山内昌之編 『いま、なぜ民族か』 東京大学出版会、1994年。
- ・ 小熊英二 『単一民族神話の起源 <日本人>の自画像の系譜』 新曜社、1995年。
- ・ 小坂井敏晶 『民族という虚構』 東京大学出版会、2002年。

2. 東アジアという問題設定について

- ・ 宮嶋博史・李成市他編 『植民地近代の視座 朝鮮と日本』 岩波書店、2004年。

3. キリスト教思想と民族・家族

- ・ John Diminic Cressan, *Jesus. A Revolutionary Biography*, Harper San Francisco, 1994
- ・ 芦名定道 「東アジア世界における宗教的寛容と公共性」、紀平英作編 『対話と寛容の知を求めて 人文学の未来』(下巻『新たな人類知を求めて』) 京都大学学術出版、2007年(予定)。
 「ティリッヒと宗教社会主義」、現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』第11号、2007年(予定)。
- ・ 芦名定道 「東アジアの宗教状況とキリスト教 - 家族という視点から - 」、『アジア・キリスト教・多元性』(現代キリスト教思想研究会)創刊号 2003年。

4. 日本のキリスト教、とくに内村鑑三

- ・ 土肥昭夫 『日本プロテスタント・キリスト教史』 新教出版社、1980年。
- ・ 宮田光雄 『平和の思想史的研究』 創文社、1978年。
- ・ 『内村鑑三全集』『内村鑑三選集』 岩波書店。
- ・ 鈴木範久監修、藤田豊編 『内村鑑三著作・研究目録』 教文館、2003年。